

映画 特集 安楽死 特区

死にたい、と願うのはエゴですか？
生きていて、と望むのは愛ですか？

映画「安楽死特区」が注目されている。2019年にブックマン社から出版された長尾和宏著「小説『安楽死特区』」が原作。医師である著者が製作総指揮を執り、高橋伴明氏が監督を務めた。脚本は丸山昇一氏。国会で「安楽死法案」が可決され、国家戦略特区として「ヒトリスズカ」という施設が誕生。若年性パーキンソン病で余命宣告されたラッパー酒匂章太郎(毎熊克也氏)と恋人のジャーナリスト藤岡歩(大西礼芳氏)は安楽死に反対しており、施設の実態を暴くために入所する。

初めは医師に立ち向かっていった章太郎だが、病状が悪化するにつれ、安楽死を望むようになる。そんな変化に戸惑いながらも、歩は安楽死を少しずつ受け入れることになる。本の帯に「死にたい、と願うのはエゴですか?」「生きていて、と望むのは愛ですか?」とある。この映画のテーマはまさにこれだ。

2月6日、第七藝術劇場(大阪市淀川区十三本町1)での上映後、長尾和宏氏が舞台挨拶を行った。欧米では安楽死を認めている国が多いが、日本はハードルが高い。個人主義が確立されている国と家族制度が根付いている国の差だと説明。



舞台挨拶で会場からの質問に答える長尾和宏氏